

# 大伴坂上郎女の歌一首

——恋ひ恋ひて会へる時だに——

遠藤 宏

大伴坂上郎女のことを偉大なる二流と評

した人が曾ている。万葉集に残した全歌数八四首という歌数が万葉女流歌人の中では抜きん出て多いのみならず、万葉全歌人中

でも大伴家持・柿本人麻呂に次いで多いということに比して、質的にはたいして高い

評価を与えられないという理由によるし、彼女の男性遍歴の多いことにもよっている

と思われる。つまり、作品の質にくらべれば名のみことごしいというわけである。

しかし、作品の質をいう時、従来の価値判断の基準には、真情の吐露の有無あるいは濃希が大きな重みを占めていたように思われる。そのような基準を設定することも勿論あつてよいし、また、そのような基準に従えば、彼女の作にあまり高い評価は与え

られないではあろう。しかし、価値基準は唯一であるべきではない。例えば、感性の豊かさという点に着目すれば、彼女には捨て難い豊かで鋭い感性のきらめきがある。曾て私自身も採り上げたことのある例だが、

ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる  
月夜の見ればかなしさ  
(巻六・九八二)

には、夜霧を通しておぼろに照る月光に一種甘く切ない情感が感じ取られていて、その感性には凡庸でないものが看取できる。

また、必ずしも自己の体験に基づく生まの感情の告白というのではない、ある状況下に置かれた一個の仮空の人間の感情を造型し

ていくという点にも冴えた手腕を見せている。この点などは、彼女の才気という、一面では認めながら一面では否定的な口吻の評言をもって指摘されているものである。だが、彼女のいわゆる「才気」は決して軽視してよい性質のものではないと思われる。結構豊かな人間観察の鑑識眼が働いていると見てよい。ここに採り上げる歌も、そのような部類に入れてもよきそのような例の一つである。

恋ひ恋ひて会へる時だにうつくしき言尽してよ長くと思はば(巻四・六六一)

題詞には「大伴坂上郎女の歌」としか記されていない。従つて、歌作の背景、状況などは全くわからない。宴席などの場での題詠かとも推測されている。その推測は当たっていると思われるのだが、そうであるならば、坂上郎女という特定の個人の美人生を抜きにして、この歌を鑑賞することになる。また、仮りに題詠ではなくとも、作歌事情が全く不明なのだから、我々の前にあるのは歌だけであつて、事は右述の場合と

同様になる。従って、この歌の鑑賞には、歌を組み立てていることばのみが唯一の確実な手だてとなる。もっとも、その方が受け手の側の想像力を自由に働かせることができるので、作歌事情の分明な作よりも、ある意味では存分に味読できるということにもなる。長い前説は以上の如くにしておく。

右掲の歌一首の意は、恋しい思いを続けてやつと会っているせめてその時くらいは優しいことばの限りを私に掛けて下さい。私との仲を長く保ちたいと思つたならば、というものである。

「恋ふ」(名詞は「恋<sup>こひ</sup>」)は、愛する「恋愛」といった、現代用いる「恋」の意とは異り、密着していたい対象(人間とは限らないし、人間でも恋人に限定はされない)と離れている状態の時、密着したいと熱望するがゆえに生じる、切なく悲しくまた苦しくつらい思いを表わすことばである。口語では「恋しい」が最も近いかと思うが、「恋ふ」の方が思いの深さにおいては何倍も深い。本歌における「恋ふ」感情の生じる対象は恋人(男)であろう。「恋ひ恋ひ

て」は「行き行きて駿河の国に至りぬ」(伊勢物語)の「行き行きて」と同じ語法で、長い間ずっと恋しい思いを続けていたの意になる。「恋ひ恋ひて会へる」には、苦しくつらい思いを続けながらようやく会えた、苦悩と歓喜のないまぜになった感情が表現されている。特に「恋ひ恋ひて」には、長い間の苦しさが絞り出すように吐か

れている。「うつくし」は、美しいの意ではなく、優しいこまやかな情愛のこもった心情を表わすことば。そのようなことばのありつたけを私に言つてよオと、歴然たる甘えた口ぶりが第三、四句にはある。会いたくても会いたくても会えず、苦悩の状態が長く続いた末にやつと会えた。会えたというだけで、それまでのつらさは全て消し飛び、満ち足りた思いになるとは考えられる。しかし、この女性(敢えて坂上郎女とは言わないでおく)は、それでは満たされない。長い間あなたが私の許を訪れなかったことによる、その間の私の苦しみの代償を、真情あふれる優しいことばで払ってほしいというのだ。喉を鳴らして足許にすり付く猫のごとくである。男はまた、そんな

女にそれまで以上の抱きしめたくなるほどのいとおしさを憶えることであろう。そのような男の心理を読み尽した女、男の自分への愛情に絶対の信を置いた女が、ここにはある。会えないでいる時には男の愛に不信を抱いていたはずなのに、会えたという結果がその不信を粉碎し霧消させてしまうのである。

結句の「長くと思はば」は一種、贅言とも取れる。「思はば」という仮定の表現は、男が「長く」と思っているはずだという自信に裏打ちされているが、一応控え目なポーズではある。こんな私を嫌いなら私はあきらめます、無理にとは申しませんという、伏し目勝ちに上目を使つての言である。遠慮勝ちで、しかも、最後につけ加えたこと自体、控え目である。こういう女に男は弱い。本歌には、男の心理を読み尽した女の媚態が鮮かに描かれていて、坂上郎女の女を見る眼力と描出力の確かさを見せつけている。